

優秀賞

神奈川・聖園女学院高等学校 一年

瀬戸 ことね

「円香姉ちゃん！早く片付けないと、兄ちゃん達きちやうよ！」

そんな忙しい弟の声に、不貞腐れた様子で円香は本を讀んでいる手を止めた。カラリ、とローテーブルに置かれたグラスの中の氷が溶けて崩れた音がする。円香は本を本棚へと押し込んだ後、ジュースの入っているグラスを持って台所へと向かった。

台所の大きなテーブルの上には、大量の料理が所狭しと並んでいた。きゅりの漬物、肉じゃが、牛の角煮、いわしの梅煮。旬のものが並ぶ食卓には、何膳ものお箸がともに並べられている。その上には、それらの料理を覆ってしまふほど大きな蠅帳が被されていた。円香の弟の敬太は、先程から落ち着かない様子で窓の外を見ている。茹で上がったばかりの素麺を母がテーブルに置きながら、窓にへばりつくようにして外を眺めている敬太を見て笑った。

「もうすぐ来るんだから、もう少しお片付けしてちょうだい」

そんな母の一声に、敬太はハツとした顔をしてリビングに広げていたゲーム機を片付け始める。自分もまだ片付けていなかったわ、と内心ツツコミを入れながら、円香も自分の私物を片付け始めた。

円香達は、祖母の家で暮らしている。両親に母方の祖母、兄の真太、弟の敬太という、六人家族だ。そして今日、そんな円香達の家に、とある客が来る予定になっていた。

「コロナ禍も明けて、受験も終わって、やっとみんなで集まれるねえ」

廊下から、ジャラジャラと音を立てながら玉暖簾をくぐって祖母が台所へと

やつてきた。仏壇に供えていたスイカを冷やそうと持ってきたらしい。円香は冷蔵庫の一番下の段を開けて、祖母から受け取ったスイカを中へと押し込んだ。すると、後ろから敬太の嬉しそうな声が聞こえる。

「来た！春樹達だ！」

片付け途中のゲーム機を床に置いたまま、母の静止の声も聞かずに、敬太は玄関へと駆け出す。そんな弟の後ろ姿を、円香は一瞥してため息をついた。

今日は、八月十三日。世間ではいわゆる月遅れの盆が始まる日である。

そして、そんなお盆に合わせたお盆休みに、久しぶりに祖母の家へ集まろうと円香達のいところが出て来るのであった。玄関へ駆け出して行った敬太に手を引かれて、まだゲーム機の散らかるリビングへと入ってきたのは、兄の真太と同じ年の春樹。それから、春樹の後ろをぴたりとくっついて入ってきたのが、いとこの中では最年少の麻衣である。久しぶりのいとこの登場に、祖母と母が口許に笑みを浮かべた。

「暑いのによく来たねえ」

「たくさんお料理作ったから、よかつたら食べてね」

春樹はありがとうございます、と呟いてから席についた。それに習うように、春樹の妹の麻衣も隣に腰を下ろす。その麻衣の様子に円香は驚いて目を見開いた。少し前まで叔母の手を決して離さず、歩く姿も覚束なかったというのに。今回は兄の春樹と二人だけで円香の家へとやってきた。そして、今ではこうして席について、一人で、盛られたご飯を食べている。じつと麻衣を凝視する円香を見て、母がくすくすと笑った。

「そうよね、だって最後にあつたのはもう、四年前だものね」

その言葉に、その場にいた全員がこくこくと頷いた。四年前の新型ウイルス、コロナの流行から、親戚同士の関わり合いは少なくなってしまった。ようやく制限が緩和されてきた去年は、円香の高校受験、真太と春樹の大学受験が被り、こうして集まるのは、実に四年ぶりであった。その四年の月日は、流

れてしまえばあつという間ではあるものの、こうして麻衣の成長を見ていると、
どれだけ長い期間だったのかを思い知る。

「それじゃあ、すんげえいさしかぶり、つてことだねえ」

「すんげえいさしかぶり？」

祖母が呟いた言葉を、麻衣がオウムのように繰り返しながら首を傾げた。

隣で素麺を啜っていた春樹も、考え込むように箸を止めた。

「すんげえは、すぐくつて意味だつてわかるけど、いさしかぶりは聞いたことな
いなあ」

春樹の言葉に、うんうん、と円香と敬太は深く頷いた。

「ふふ、いさしかぶりはね、久しぶりつて意味なんだよ」

神奈川の方言なの、と悪戯つ子のように口角をニヤリと上げた祖母に、敬太
と麻衣は目を輝かせた。

訛りのない地域で育った祖母は、普段の会話には訛りはない。どうしてそん
な言葉を使ったのかと疑問に思っていると、祖母は湯呑みに緑茶をトクトク
と注ぎながら答えた。

「昔ね、ここに嫁いできたときに、色んな人から神奈川弁を教えてもらつたん
だよ。使うことはあんまり無かつたけど、最近じゃあ、周りでも聞かなくなっ
ちやつたから。少し、話してみたくなってね」

窓の外の、庭先よりもずっと遠くを見据えるような祖母の瞳には、きつと昔
のこの家の周りの風景が広がっているのだろう。懐古するような、寂しいだと
か悲しいだとかの感情が緋い交ぜになったその横顔に、円香の心臓は大きく
どくん、と跳ねた。それと同時に、円香は少しだけ、昔のことについて興味が
湧いた。そしてそれは、春樹や麻衣、敬太も同じようで、四人は祖母の話に
前のめりになって尋ねる。

「他に神奈川弁つて、どんなのがあるの？」

「俺も！もつと知りたい！」

教えて、教えて、と飛びつくような勢いで尋ねてくる孫たちを見ながら、祖

母と母は、顔を見合わせて微笑んだ。

一日が沈みかけ、空の色が茜色に染まった頃。玄関のガチャ、という開く音
に、敬太は再び駆け出す。ただいま、という声が響く前に、敬太が大きな声
で言った。

「いさしかぶり！」

円香が玄関向かうと、そこには敬太に大声で挨拶をされて、ぱちぱち、と
目を何度か瞬きをしている兄の真太の姿があった。敬太に続くように、リビ
ングからひよこり顔を出した麻衣と春樹が、同じように、いさしかぶり！と
叫ぶ。未だに、弟といとこの発言が理解できずに固まったままの真太に、円
香もいさしかぶり、と呟いてみる。後ろで祖母と母の笑い声が聞こえた。

「いさしかぶりはね、久しぶりつて意味なんだよ！」

そう嬉しそうに言う麻衣の頭を、真太がわしわしと撫でる。頭を撫でられ
た麻衣は、きやあ、と小さく歓喜の声を上げた。真太は上がり框に腰を下
ろし、靴を脱ぎながら呟く。

「じゃあみんな、いさしかぶりつてことか」

「うん、みんな、いさしかぶりだよ！」

他にもね、と指を一つずつ折りながら説明し始めた麻衣と敬太の話を、真
太は領きながら聞いている。なんだか、不思議な感じだ。日本語で話してい
るはずなのに、魔法の呪文を唱えているように、胸の奥が温まるような気が
する。昔と今を繋ぐ言葉、方言。もしかすれば、身近にも、方言というもの
は溢れているのかもしれない。

どこか浮足立つような心地で、円香はリビングへと戻った。

夏の夜といえど、十九時は辺りがほの暗くなる。そんな時間に、円香達は
玄関先の庭へ出て、輪を描くように座り込んだ。祖母が火をつけたおがらが
輪の中心でぱちぱちと音を立てて燃えていく。ゆらゆらと揺れながら空高
く昇っていく迎え火を、みんなで眺めていた。焙烙の上で踊るように爆せてい
た火を、父がそつと蠟燭に移し、盆提灯の中に入れた。

「ご先祖様が喜んでるから、こんなに火の勢がいいんだよ」
盆提灯を持ち上げて、祖母が言う。

「じゃあ、ご先祖様にも、いさしかぶり？」

円香の手を握りながら、そう尋ねた麻衣に、ゆつくりと頷く。色鮮やかな花柄が、ぼんやりと蝋燭の灯りに照らされて淡く光を放つ。盆提灯の光に照らされながら、円香達は静かに目を瞑って手を合わせた。やがて火の音はなくなり、夏の鳴き虫達の声が庭の草むらから聞こえてくる。こうしてみんなでお盆を過ごすのは、とても久しぶりだった。また来年も、こうして集まれたら良いと願いながら、円香は盆提灯の灯りを眺める。盆提灯から放たれる、橙色の灯りだけが、辺り一面を照らし出していた。

お盆が終われば、いとこたちはそれぞれの家へと帰っていく。また次に会うとき、笑顔でいさしかぶり、と言いかういとこたちの姿を想像すれば、不思議と見送りに寂しい気持ちを感じなかった。あれだけ聞こえていた蝉の声も、今ではもうほとんど聞こえない。蚊取り線香の匂いも、もうしなくなった。そうして、あつという間に長かったはずの夏休みが終わる。新学期が始まり、毎日の学校生活が戻ってくる。

カラカラに乾いた快晴の空の下、円香はいつも通りの通学路を、前よりも軽い足取りで歩く。ふと、前方にこちらに向かって大きく手を左右に振る友人の姿を見つけて駆け寄った。おはよう、と声をかけていた友人に、円香は満面の笑みで応えた。

「いさしかぶり！」

なにそれ、と首を傾げる友人たちに、円香は得意げにしてやったり顔をする。円香の家で、祖母がくしゃみをしたような気がした。